# 新田義貞の死をめぐって：『太平記』巻二十の構成と展開


| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2021-11-30 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 谷垣, 伊太雄 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4650 |

# 新田義貞の死をめぐって

## ―『太平記』巻二十の構成と展開―

谷垣伊太雄

### 一

楠正成が五月二十五日に湊川で自害した建武三年（延元元年・一三三六）、十月十日に比叡山より京に還幸した後醍醐天皇は花山院に幽閉の身となる。一方、足利尊氏は十一月七日に「建武式目」を制定[注1]し、幕府の体制を固める。その十二月二十一日、後醍醐帝が吉野へ潜幸。ただし、「先帝潜幸芳野事」の章から始まる『太平記[注2]』巻十八では、「八月二十八日ノ夜ノ事ナレバ道最暗シテ可レ行様モ無リケル処ニ、俄ニ春日山ノ上ヨリ金峯山ノ嶺マデ、光物飛渡ル勢ヒニ見ヘテ、松明ノ如クナル光終夜天ヲ耀シ地ヲ照シ」「行路分明ニ見ヘ」たことが記され、それは、吉野の「蔵王権現・小守・勝手大明神」が「三種の神器ヲ擁護シ万乗ノ聖主ヲ鎮衛シ給フ瑞光」であったと語られる。ただ、尊氏は「君花山院ニ御座ノ故ニ、警固申ス事、其期ナキニヨテ以ノ外武家ノ煩」であり「迷惑」であったため、「今ノ出御ハ大儀ノ中ノ吉事也」とし、後醍醐帝が「定畿内ノ山中ニ御座有ベキ歟。御進退ヲ叡慮ニ任テ自然ト落居ハ可然事也」と語り、「運ハ天ノ定ル処也。浅智ノ強弱ニヨルベカラザル者カナ」と語ったことが『梅松論[注3]』には記されており、『太平記』の説話的叙述にも拘らず、尊氏が全てを知った上で容認する態度をとったというのが歴史的現実であったと考えられる。

ところで、後醍醐帝の還京の際に越前へ下った新田勢のうち、建武四年（延元二年・一三三七）三月六日の金崎城落城の中で、新田義顕・尊良親王の自害が巻十八に描かれる。巻十九では、越前における新田義貞勢の進攻に呼応する形で諸国の宮方勢が蜂起する中、北条時行（かって後醍醐帝と敵対した高時の遺児）さえも吉野へ使者を送って後醍醐帝から「恩免ノ綸旨」を受けて宮方となったこと、奥州国司北畠顕家が鎌倉をはじめとして各地で勝利を納めつつ美濃国まで西上して来た過程が描かれる。

しかし、「国司ノ勢十万騎」は「垂井・赤坂・青野原ニ充満シ」ていたが、顕家は「俄ニ士卒ヲ引テ伊勢ヨリ吉野へ」移動し、奈良からの上洛は叶わぬまま、延元三年（一三三八）五月二十二日「和泉ノ堺安部野」で討死してしまう。(注4)

このような展開を受けた巻二十の章立ては、次の通りである（通し番号を付けた）。

一、黒丸城初度軍事付足羽度々軍事
二、越後勢越々前事
三、宸筆勅書被下於義貞事
四、義貞牒山門同返牒事
五、八幡炎上事
六、義貞重黒丸合戦事付平泉寺調伏法事
七、義貞夢想事付諸葛孔明事
八、義貞馬属強事
九、義貞自害事
十、義助重集敗軍事
十一、義貞首懸獄門事付勾当内侍事
十二、奥州下向勢逢難風事
十三、結城入道堕地獄事

章段名を概観してもわかるように、巻二十は宮方勢の動向を中心に物語が展開する。しかも、巻十九の北畠顕家と巻二十の新田義貞とが〈対〉をなす形で描かれ、二人の死が語られる事を考える時、次の巻二十一における「先帝崩御」（後醍醐帝の死）の叙述を以て、物語の一つの核をなすものが、変わっていかざるを得ない時点にさしかかっていることも伝わってくる。

第一章では、「越前ノ黒丸城」に拠る足利尾張守高経を攻め落としてから上洛しようとする新田義貞勢が、延元三年五月二日以後、足羽城を攻めるものの攻略しきれない状況が描かれる。

第二章では、義貞勢上洛の動きを知った越後勢二万余騎が、七月三日に越後を出立し、越中・加賀の合戦で勝利を納め、加賀の「今湊ノ宿」に逗留するまでが記される。

第三章では、足羽城を包囲した義貞勢三万余騎が「様々ノ攻支度」をしているところへ「芳野殿ヨリ勅使」が到着し、八幡山（石清水八幡宮）に拠る新田義興・北畠顕信勢の疲弊を知らせ「京都ノ征戦ヲ専ニスベシ」と「御宸筆ノ勅書」を伝えたため、義貞が足羽城攻めを中止して京都への進攻を急いだ事が描かれる。

第四章では、児島高徳の進言に同意した義貞が山門（延暦寺）へ協力要請の牒状を送り、山門からも協力了承の返牒が届き、喜んだ義貞は直ちに上洛を決意するものの、尾張守高経の動きを警戒して「義貞ハ三千余騎ニテ越前ニ留リ、義助ハ二万余騎ヲ率シテ七月廿九日越前ノ府ヲ立テ、翌日(注5)ニハ敦賀ノ津ニ」到着したと叙述される。

第五章では、まず、義助軍の動きを知った将軍（足利尊氏）が、八幡山を攻めていた高師直に「急八幡ノ合戦ヲ閣テ、京都へ帰テ北国ノ敵ヲ相待ベシ」と命じたことを受けて、師直が八幡山の神殿に

放火した事が描かれる。又、「八幡山ノ炎上」について、義助勢が「実否ヲ聞定ン為ニ」敦賀に逗留している間に、八幡の官軍は河内へと退却せざるを得なかった事も記される。

第六章では、「八幡ノ官軍」との「相図相違」により「心閑ニ越前ノ敵ヲ悉ク対治シテ、重テ南方ニ牒合テコソ、京都ノ合戦ヲバ致サメ」として、義貞も義助も足羽城を攻めようとしたのに対し、尾張守高経が「三百騎ニ足ザル勢」で応戦するために「深田ニ水ヲ懸入テ、馬ノ足モ立ヌ様ニコシラヘ、路ヲ堀切テ穽ヲカマヘ、橋ヲハヅシ溝ヲ深シテ、其内ニ七ノ城ヲ拵ヘ、敵セメバ互ニ力ヲ合テ後ヘマハリアフ様ニ」備えを固めた事が記される。高経は更に平泉寺衆徒からの申し出を承諾して藤島庄を寄進したため、衆徒のうち「若輩五百余人」は城に立て籠り、「宿老五十人」は「怨敵調伏ノ法」を行なった。

第七章では、義貞の見た「不思議ノ夢」の話が展開する。それは、高経と対陣していた義貞が「タカサ三十丈計ナル大蛇ニ成テ、地上ニ臥」すという夢であった。義貞が夢について語ると「目出キ御夢ナリ」と夢解きされたが、「垣ヲ阻テ聞」いていた斎藤道猷[注6]は「眉ヲヒソメテ潜ニ」凶夢であると言い、三国時代の中国故事を[注7]引用して「道猷ハ強ニ甘心セズ」と語った。しかも、「諸人ゲニモト思ヘル気色ナレドモ、心ニイミ言バニ憚テ、凶トスル人」はなかった。

第八章では、「閏七月二日、足羽ノ合戦ト触レラレ」たため、義貞の陣河合庄に三万余騎が集結した中での義貞について、「巍々タルヨソヲヒ、堂々タル礼、誠ニ尊氏卿ノ天下ヲ奪ンズル人ハ、必義貞朝臣ナルベシト、思ハヌ者ハナカリケリ」と描写される。ただ、義貞が乗ろうとした「水練栗毛トテ五尺三寸有ケル大馬」が「俄ニ属強ヲシテ、騰跳狂」ったため、「左右ニ付タル舎人二人」が「半死半生」になったこと、足羽河を渡る時に乗馬が「俄ニ河伏ヲシ」たため「旗サシ」が水に浸ったことも記される。

第九章では、義貞の最期が語られる。義貞は、燈明寺の前で「三万余騎ヲ七手ニ分テ、七ノ城ヲ押阻テ、先対城ヲ」築いたものの、平泉寺衆徒の立て籠る藤島城への攻撃に手間どり、日没を迎えようとしていた。戦況を懸念した義貞は「馬ニ乗替ヘ鎧ヲ著カヘテ、纔ニ五十余騎ノ勢ヲ相従ヘ、路ヲカヘ畔ヲ伝ヒ」藤島城へと向かった。ところが、足利高経の拠る黒丸城から援軍としてやって来た細川・鹿草の三百余騎は「歩立ニテ楯ヲツイタル射手共多カリケレバ、深田ニ走り下り、前ニ持楯ヲ衝双テ鏃ヲ支テ散々ニ射」たのに対し、義貞側には「射手ノ一人モナク、楯ノ一帖ヲモ持セザレバ」、義貞の矢面には「前ナル兵」が立つしかなかった。しかも、中野藤内左衛門が目配せで制止したにも拘らず、義貞は馬に鞭あてて進もうとした。ところが、この馬は「名誉ノ駿足」であったが「五筋マデ射立ラレタル矢」に弱っていたせいか「小溝一ヲコヘカネテ、屏風ヲタヲスガ如ク、岸ノ下ニ」倒れてしまった。「弓手ノ足ヲシカレテ、起アガラントシ」た義貞の「真向ノハヅレ、眉間ノ真中」に「白羽ノ矢一筋」が命中し、「一矢ニ目クレ心迷」った義貞は「自ラ顎ヲカキ切テ、深泥ノ中ニ蔵シテ、其上ニ横テ」絶命する。

越中国の住人氏家重国が「畔ヲ伝テ走リヨリ」義貞の首を「鋒ニ

貫キ」鎧や太刀と合わせ持って黒丸城へ馳せ帰った。重国から足利高経に届けられた首は、左の眉の上の矢疵や「源氏重代の重宝」である太刀、「吉野ノ帝ノ御宸筆」の書の入った「膚ノ守」等から、義貞であると確認され、尸骸は「輿ニ乗セ時衆八人ニカヽセテ、葬礼ノ為ニ往生院ヘ」送られ、首は「朱ノ唐櫃ニ入レ、氏家ノ中務ヲ副テ、潜ニ京都ヘ」送られた。

第十章では、義貞の死を知って四散していく者も多く、三万余騎から二千騎にも足らぬ数へと軍勢が激減する中、義助・義治父子が七百余騎で越前の府へ帰ったことが記される。

第十一章では、京都に送られた義貞の首が「大路ヲ渡シテ獄門ニ懸ラ」れたことが短く記されたあと、「中ニモ彼ノ北ノ台勾当ノ内侍ノ局ノ悲ヲ伝ヘ聞コソアハレナレ」として、時間を遡行させて、義貞との出会いから戦乱による別離、やがて迎えられて越前へと赴くものの会えぬまま義貞の死を知らされ、帰京の後、剃髪して「嵯峨ノ奥ニ往生院ノアタリナル柴ノ扉ニ、明暮ヲ行ヒスマシテ」すごしたことまでが詳述される。

第十二章は、義貞が「足羽ニテ討レヌ」との報を受け、「叡襟更ニヲダヤカナラズ、諸卒モ皆色ヲ失ヘリ」という状況の中、結城上野入道道忠の提案により、「第八宮ノ今年七歳ニナラセ給フヲ、初冠メサセテ、春日少将顕信ヲ輔弼トシ、結城入道々忠ヲ衛尉トシテ、奥州ヘ」送ることが決定したこと、更に新田義興・北条時行を「東八箇国ヲ打平テ宮ニ力ヲ副奉レ」と「武蔵相模ノ間ヘ」下すことになった事が記される。

ただ、九月十二日に「伊勢ノ大湊」より出帆した兵船が天龍灘で暴風に遭い、多数の船が行方不明になった中、第八宮（義良親王）の御座船だけが「光明赫奕タル日輪、御舟ノ舳前ニ現ジテ」、「伊勢国神風浜」へ吹き戻されたことが記され、この宮が、のちに「吉野ノ新帝」になることが「天照大神ノ示サレケル者」として語られる。

第十三章では、結城上野入道（宗広）が「七日七夜」海上を漂流した後「伊勢ノ安濃津」へ吹き寄せられ、十数日後に再び奥州へ下ろうとしていたところ「俄ニ重病ヲ受テ起居モ更ニ叶ハズ」なり、枕元に「善知識ノ聖」が呼ばれ「御心ニ懸ル事候ハヾ仰置レ候へ。御子息ノ御方様ヘモ伝ヘ申候ハン」と告げたのに対し、目を閉じようとしていた宗広が急に起き上がって「カラ〳〵ト打笑ヒ、戦タル声」で死後の供養は不要であると告げた上で、「只朝敵ノ首ヲ取テ、我墓ノ前ニ懸双テ見スベシト云置ケル由伝テ給リ候ヘ」を「最後ノ詞」として、「刀ヲ抜テ逆手ニ持チ、断歯ヲシテ」絶命する様が描かれる。

その後に、宗広の「平生ノ振舞」が「十悪五逆重障過極ノ悪人」であったと語られ、更に「所縁ナリケル律僧」が「武蔵国ヨリ下総ヘ下ル事」があり、宿を探していたところ、一人の山伏が現れて「接待所」へと案内され、そこで地獄で苦しむ罪人の姿を見せられる。山伏は「是コソ奥州ノ住人結城上野入道下申者、伊勢国ニテ死シテ候ガ、阿鼻地獄ヘ落テ呵責セラル、ニテ候ヘ」と語り、自分は「我ハ彼入道今度上洛セシ時、鎧ノ袖ニ名ヲ書テ候シ、六道能化ノ地蔵薩埵」であると述べる。僧は急いで奥州に下り、結城入道の子息に

この話を伝える。「是皆夢中ノ妄想カ、幻ノ間ノ怪異カト、真シカラズ思」っていたところ、三四日経て、伊勢よりの飛脚が到着し、宗広の死を告げたため、子息は追善供養を行なった。最後に地蔵菩薩の誓願が「タノモシカルベキ御事也」と記されて、巻二十が終わる。

## 二

第一章の新田義貞については、叡山に登り「山門ノ大衆」との「旧好」を確認した上で吉野の官軍と協力しての京都進攻が容易であったのに、足利尾張守高経の立て籠る越前黒丸城を「攻落サデ上洛セン事ハ無念ナルベシト、詮ナキ小事ニ目ヲ懸テ、大儀ヲ次ニ成」した事が「ウタテケレ」と描かれ、続いて、足羽城を攻めた一条少将・船田長門守・細屋右馬助の次々の敗退が、「此三人ノ大将ハ、皆天下ノ人傑、武略ノ名将タリシカドモ、余ニ敵ヲ侮テ、蹟ニ大早リナリシ故ニ」敗北したと述べられる。

第二章では、越後より進攻し、加賀の今湊に逗留した官軍が「剣・白山以下所々ノ神社仏閣ニ打入テ、仏物神物ヲ犯シ執リ、民屋ヲ追捕シ、資財ヲ奪取」った事が「嗚呼霊神為レ怒則、災害満レ岐トイヘリ。此軍勢ノ悪行ヲ見ニ、其罪若一人ニ帰セバ、大将義貞朝臣、此度ノ大功ヲ立ン事如何アルベカラント、兆前ニ機ヲ見ル人ハ潜ニ是ヲ怪メリ」と、その責任が義貞に帰着するものとして描かれる。「直ニ宸筆ノ勅書」を受け取った義貞が京都へ急いで進攻しようとする第三章を受けて、第四・五・六章では、足利高経の存在を懸念して軍勢を「二手ニ分」ける義貞、戦況確認のために「徒ニ日数ヲ送ル」義助らの動きが記された後、結局「心閑ニ越前ノ敵ヲ悉ク対治シテ、重テ南方ニ牒合テコソ、京都ノ合戦ヲバ致サメ」として、義貞・義助が、まず足羽城を攻めようとした事が描かれる。

しかし、第五章では「此時若八幡ノ城今四五日モコラヘ、北国ノ勢逗留モナク上リタラマシカバ、京都ハ只一戦ノ内ニ攻落スベカリシヲ、聖運時未至ラザリケルニヤ、両陣ノ相図相違シテ、敦賀ト八幡トノ官軍共、互ニ引テ帰リケル薄運ノ程コソアラハレタレ」と、仮定法叙述による展望が記され、一方、第六章では「御方僅ニ二百騎ニ足ザル勢」で戦う足利高経が細心の作戦を立て、充分に防禦態勢を整え、更に藤島庄を寄進することで平泉寺衆徒を味方とした事が描かれる。

第七章では、義貞の夢を斉藤道猷が凶と夢解きしたものの、義貞の耳には達しなかったことが語られ、第八章では、「巍々タルコソヲヒ、堂々タル体」の義貞描写の後に、その乗馬が「俄ニ属強ヲシテ」二人の舎人が半死半生となった「不思議」に続けて、足羽河を渡っていた「旗サシ」の馬が「俄ニ河伏ヲシテ」旗手が水に浸ったとの記述があり、「加様ノ怪共、未然ニ凶ヲ示シケレ共、已ニ打臨メル戦場ヲ、引返スベキニアラズト思テ、人ナミ〳〵ニ向ヒケル勢共、心中ニアヤフマヌハナカリケリ」との予測が記される。

そして、ただ、滅亡へと漸層的に叙述が展開されて来て、第九章で義貞の最期が描かれることなる。「三万余騎ヲ七手ニ分テ」陣を

構えた義貞であったが、「官軍ヤ、モスレバ追立ラル、体ニ見ヘケル間、安カラヌ事ニ思ハレケルニヤ、馬ニ乗替ヘ鎧ヲ著カヘテ纔ニ五十余騎ノ勢ヲ相従ヘ、路ヲカヘ畔ヲ伝ヒ」藤島城へ向かう。

細川・鹿草勢と真正面から鉢合せした義貞勢は「射手ノ一人モナク、楯ノ一帖」も持っていなかったため、軍兵が「義貞ノ矢面ニ立塞」がるしかない状況の中、中野藤内左衛門の警告の目配せに対し、義貞は「キ、モアヘズ、失レ士独免ル、ハ非二我意一ト云テ、尚敵ノ中ヘ懸入ント、駿馬ニ一鞭ヲスヽメ」た。ところが、「一二丈ノ堀ヲモ前々輒ク越」えていた「名誉ノ駿足」の馬は「五筋マデ射立ラレタル矢」のために弱っていたのか「小溝一ヲコヘカネテ、屏風ヲタヲスガ如ク、岸ノ下ニ」倒れてしまい、左脚が下敷きとなった義貞が起き上がろうとしたところへ飛来した「白羽ノ矢一筋」が「眉間ノ真中」に突き刺さり、「今ハ叶ハジトヤ思ケン」義貞は自分で「頸ヲカキ切テ」絶命する。

氏家中務丞重国に首を持ち去られた後、結城上野介・中野藤内左衛門尉・金持太郎左衛門尉が「馬ヨリ飛ビ下リ、義貞ノ死骸ノ前ニ跪テ、腹カキ切テ重リ臥」したが、「此外四十余騎ノ兵」は「皆堀溝ノ中ニ射落サレテ、敵ノ独ヲモ取得ズ。犬死シ」たと記され、「此時左中将ノ兵三万余騎、皆猛ク勇メル者共ナレバ、身ニカハリ命ニ代ラント思ハヌ者ハ無リケレ共、小雨マジリノ夕霧ニ、誰ヲ誰トモ見分ネバ、大将ノ自ラ戦ヒ打死シ給ヲモ知ラザリケルコソ悲ケレ」と描かれるが、「ヨソニアル郎等が、主ノ馬ニ乗替テ、河合ヲサシテ引ケル」のを、遠方より見た「数万ノ官軍」が「大将ノ跡ニ随ン」ト、見定メタル事モナク、心々ニゾ落行ケル」とも記され、先例としての漢の高祖・斉の宣王の死が引用された後、義貞の夢（第七章）のまとめともなる「蛟龍ハ常ニ保二深淵之中一。若遊二浅渚一、有二漁網釣者之愁一」の一文の後に、「此人君ノ股肱トシテ、武将ノ位ニ備リシカバ、身ヲ慎ミ命ヲ全シテコソ、大儀ノ功ヲ致サルベカリシニ、自ラサシモナキ戦場ニ赴テ、匹夫ノ鏑ニ命ヲ止メシ事、運ノ極トハ云ナガラ、ウタテカリシ事共也」との評語が付けられて、義貞の死が締め括られる。

官軍（後醍醐帝側）の実戦的武将という存在であった新田義貞の死は、巻十六の楠正成・巻十九の北畠顕家のそれとは異なるものとして描かれる。

「武略智謀其家ニアラズトイヘドモ、無双ノ勇将」であった顕家の死は、「聖運天ニ不レ叶、武徳時至リヌル其謂ニヤ」という運命的に不可避なものとして描かれ、「南都侍臣・官軍モ、聞テ力ヲゾ失ケル」と記されていた。

正成の場合は、「抑元弘以来、忝モ此君ニ憑レ進セテ、忠ヲ致シ功ニホコル者幾千万ゾヤ」という詠嘆的叙述に始まり、「仁を知ラヌ者」「勇ナキ者」「智ナキ者」について批判的に記した上で、「智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守ルハ、古ヘヨリ今ニ至ル迄、正成程ノ者ハ未無リツルニ、兄弟共ニ自害シケルコソ、聖主再ビ国ヲ失テ、逆臣横ニ威ヲ振フベキ、其前表ノシルシナレ」と記され、正成自身の死が時代状況の変化を招来・先導するものとして位置づけられている。「京ヲ出シヨリ、世ノ中ノ事今ハ是迄ト思フ所存」を持って

いた正成の〈意志による死〉とは対照的に、顕家・義貞のそれは、本人も予想しない戦死であった。とりわけ、義貞の場合は、さまざまな予兆によって、客観的には予見されたものでありながら、本人だけが察知しえない「運ノ極」としての「ウタテカリシ」死として描かれる。(注8)

ここで注意すべきことは、第一章において、義貞が「詮ナキ小事ニ目ヲ懸テ、大儀ヲ次ニ成」(傍線筆者、以下同じ)したと指摘されている点である。実は巻九第一章に次のような記述があった。

元弘二年、北条高時より上洛を命じられた足利高氏(尊氏となる前)が、高氏を疑う長崎円喜の発案によって、妻子を鎌倉に残し、起請文を提出するという二つの条件を言い渡された事があった。「所労ノ事有テ、起居未レ快ケル」中での上洛の「催促度々ニ及」んだ事に憤りを覚えていた高氏は、「鬱胸弥深カリケレ共、憤ヲ押ヘテ」退出し、弟の直義に意見を求めた。直義は、その条件について「大儀ノ前ノ少事ニテ候ヘバ、強ニ御心ヲ可レ被レ煩ニ非ズ」と述べ、「此等程ノ少事ニ可レ有二猶予一アラズ。兎モ角モ相模入道ノ申サン侭ニ随テ其不審ヲ令レ散、御上洛候テ後、大儀ノ御計略ヲ可レ被レ回トコソ存候ヘ」と主張した。結局、高氏は「此道理ニ服シテ」上洛したのであった。

そして、先にも引用した義貞の死を記す巻二十第九章の評語の中にも「大儀ノ功ヲ致サルベカリシニ、自ラサシモナキ戦場ニ赴テ、匹夫ノ鏑ニ命ヲ止メシ」と記されていた。正成・顕家と違い、義貞の場合は、その死後に勾当内侍の悲哀が語られる事によって、義貞への追悼は完結すると考えられるものの、武将としては、緊迫する状況のもとで「大儀」を選んだ足利尊氏と、「大儀」よりも「小事」に目を奪われてしまった新田義貞とでは、大きな懸隔を見せてしまったこととなる。(注10)

後醍醐天皇による倒幕計画の最終段階で武力的協力をした幕府側の人物が足利高氏(「尊氏」以前)と新田義貞とであった。両人とも、八幡大菩薩の加護を受けつつ、小勢が大軍となって行き、幕府の中枢地点へと進攻する過程は、類似した形で記される。すなわち、高氏の六波羅攻めが巻九に、義貞の鎌倉攻めが巻十に〈対〉として配置されるものの、高氏の場合は、実戦的場面が描かれることは殆どない。そして「足利治部大輔高氏」(巻九・巻十一)は、烏帽子親であった北条高時を見限り、「御諱ノ字」を下賜されて「高氏」から「尊氏」となった(巻十三)後に、その後醍醐帝(尊治)と対峙する為政者となっていく。

一方、義貞は「新田太郎義貞」(巻十。巻十一では「新田小太郎義貞」)として登場し、武蔵国へ進出した時に「二十万七千余騎」になったと記される箇所においても、「紀五左衛門、足利殿ノ御子息千寿王殿ヲ奉二具足一、二百余騎ニテ馳着タリ。是ヨリ上野・下野・上総・常陸・武蔵ノ兵共不レ期ニ集リ、不レ催ニ馳来テ」との一文に右の数字が続いていることによって、義貞が中心的存在にはなり得ないことが暗示される。

やがて、足利尊氏と後醍醐帝との対立が明確になる中で、義貞は、尊氏と真正面から対決する位置に立つこととなる。ところが、楠正

成の死後、比叡山に拠っていた後醍醐帝は、尊氏の要請を受けて京都に還幸する際に、「傍ノ元老・智臣ニモ不レ被二仰合一、軈テ還幸成ベキ由」を決め、新田一族の堀口貞満の涙を流しつつの抗議がなければ、義貞には「期ニ臨デ」の事後報告で済ませる考えであった（巻十七）。

巻二十第三章において「宸筆ノ勅書」を受けた義貞は「超涯ノ面目」と考えて上洛を急ぎ、その死後には、「膚ノ守」の中から「吉野ノ帝ノ御宸筆」の書が発見されることで「サテハ義貞ノ頸相違ナカリケリ」と確認される。

つまり、義貞からの後醍醐帝への傾倒的忠勤ぶりに比べ、帝の義貞への視線は冷静で客観的なものであったことになる。こうして、義貞は政治性という点において尊氏との距離を拡大させつつ、合戦の最先端の場で矮小化され、「ウタテカリシ」死を迎えたと言えよう。[注11]

## 三

巻十九において、鎌倉で勝利を納めた北畠顕家勢が上洛する折の「路次ノ民屋ヲ追捕シ、神社仏閣ヲ焼払フ」という記述には、「元来無慚無愧ノ夷共ナレバ」との理由づけがなされていた。

又、先にも見たように、巻二十第二章においても、越後から進攻してきた官軍が加賀の今湊宿に逗留していた十余日の間に「剣・白山以下所々ノ神社仏閣ニ打入テ、仏物神物ヲ犯シ執リ、民屋ヲ追捕シ、資財ヲ奪取事法ニ過タリ」と描かれた後に、「其罪若一人ニ帰セバ」として新田義貞の滅亡を予告する記述があった。

このように、官軍側の武将二人について、神社仏閣への狼藉が、滅亡の前兆として描かれていたのに対し、巻二十第五章においては、幕府側の重鎮たる高師直による石清水八幡宮の焼き討ちが語られる事の意味は小さくない。

師直は、巻九において、篠村で挙兵した足利高氏のもとに真っ先に駆けつけた久下一族の「一番」という笠符の由来を語って以来、尊氏の参謀役として助言をする立場にいた。たとえば、兵庫合戦において、新田勢の本間孫四郎重氏による「三人張ニ十五束三伏」の「遠矢」を射返す者について、将軍尊氏が「高武蔵守ニ尋給ケレバ、師直畏テ」佐々木筑前守顕信を推挙した（巻十六）。

又、南都に到着した北畠顕家と対決すべき「討手ノ評定」が行なわれ、「我レ向ント云人無リケリ」という状況の中で、師直が「桃井兄弟ニマサル事アラジ」と発言し、彼自身が使者となって要請したことによって、桃井兄弟は「子細ヲ申ニ及バズ」と出陣し、顕家勢を敗退させた（巻十九）。

更に、師直が、玄恵法印を「此人コソ大智広学ノ物知ニテ候ナレバ、加様ノ事共モ存知候ハンズレ。此レニ山門ノ事、委ク尋問候ハヾヤ」と紹介し、将軍も「ゲニモ」と招いたことで、玄恵による「比叡山開闢」をめぐる長物語があり、幕府側による山門への帰依が確認されたこともあった（巻十八）。

このように重い役割を演じてきた師直が、「悉モ王城鎮護ノ宗廟

ニテ、殊更源家崇敬ノ霊神」たる八幡宮に「進退谷テ」火を放った事は、官軍側から見て「寄手ヨモ社壇ヲ焼ク程ノ悪行ハアラジ」と思わせる行為であっただけでなく、『太平記』という物語世界における師直という登場人物の大きな転機を示すものであった。[注12]

これは、巻二十の巻末に展開される結城入道道忠（宗広）の「堕地獄」説話[注13]とともに、巻二十が、いわゆる『太平記』第三部世界のさまざまな問題点を発芽させつつ、官軍側の凋落だけでなく、「将軍ノ代」（湊川に赴く楠正成が桜井の宿で正行に語った）が内包する新たなる課題を提示するものでもある。

（注）

（1）この事は『太平記』に記述なし。

（2）引用は、慶長八年古活字本を底本とする日本古典文学大系本（岩波書店）による。ただし、引用に際しては、新字体に改め、振仮名を省いた。

（3）『京大本　梅松論』（京都大学国文学会）によるが、新字体に改めた。

（4）たとえば、西源院本には、顕家の南都での敗北から討死に至る記事がない。

（5）西源院本（刀江書院）には「六月三日越前之府ヲ立テ、同五日敦賀津ニソ付レケル」とある。

（6）この場面では、「斉藤七郎入道々献」と記されているが、章段末尾には、西源院本や天正本（小学館・新編日本古典文学全集）と同じく「道猷」と表記されるので、それに従った。

（7）増田欣氏は「新田義貞と諸葛孔明―太平記と三国志―」（「広島女子大国文」第9号・平成5年3月31日）において、この故事について詳しく分析され、「『太平記』は孔明の軍師としての果敢な行動について何一つ語ろうとしない」と指摘した上で、「『太平記』の作者は、回天の業を成就する仁傑としての要望を負いながら、その期待に副い得なかった悲運の将師という点に孔明と義貞との共通性を見、孔明陣没の話を挿入する契機として義貞の夢占いを仕組んだものと思われるが、それが、「臥竜」という語に陣営に病臥する孔明のイメージを漂わせる特異なニュアンスを付加する結果になったのであろう」と結論づけておられる。

（8）さまざまな凶兆を予知できぬまま「馬ニ乗替ヘ鎧ヲ著カヘテ、纔ニ五十余騎ノ勢ヲ相従ヘ、路ヲカヘ畔ヲ伝ヒ」藤島城へ向かった義貞は「射手ノ一人モナク、楯ノ一帖ヲモ持セザリ」「キキモアヘズ」「ヨハリケン」等の否定的表現の重畳の結果、死を迎えることとなる。その義貞が鎧を着替えた事は、足利高経による首実検に段階性を持たせるとともに、義貞自身が無意識のうちに死への装束を整えたと考えることもできよう。

（9）巻十六第四章では、尊氏追討の任に当たった義貞が勾当内侍と「暫ガ程モ別ヲ悲テ」西国下向を延引させた事が「誠ニ傾城傾国ノ験ナレ」と否定的に記されていた。

（10）中西達治氏は「新田義貞」（『太平記論序説』〈桜楓社・昭和60

年3月30日〉所収）において、義貞が「朝廷という制度の枠の中でしか行動できなかった」こと、「天皇の帰京を境に、天皇・義貞対尊氏という戦いの構図も大きく変質する（中略）京都を制覇し、開幕の準備を着々とすすめる尊氏にとって、いまや義貞は足利が総力をあげて戦う相手ではなくなったのであるが、作者はこれまでと変わらず、義貞に即して事件をえがき続けるのである」と指摘しておられる。

(11) 長谷川瑞氏は「新田義貞」（『太平記の研究』〈汲古書院・昭和57年3月31日〉所収）において、「義貞は勇将であっても智将ではない。換言すれば、政治家たる資格に欠けている、と太平記作者は言うのである」と述べておられ、又「尊氏の運命に対する作者の驚嘆の声は例を幾つも数える事が出来る。（中略）これに対して義貞が作者からその「運」の強さに讃嘆の声をかけられている箇所はない」と指摘しておられる。

(12) 拙稿「高師直考―『太平記』を中心に―」（池上洵一編『論集説話と説話集』〈和泉書院・二〇〇一年五月二五日〉所収）参照。

(13) 怨霊達の登場する話に関わっていくものである。